

## ガラテヤ人への手紙6章「患いなきキリスト者の務め」

### 1A 愛によって仕える律法 1-10

#### 1B 過ちの陥った兄弟の回復 1-5

#### 2B 神の家族への善 6-10

### 2A 十字架による迫害 11-18

#### 1B 外見の誇りとしての割礼 11-14

#### 2B 新しい創造にある平安 15-18

## 本文

ガラテヤ書 6 章を開いてください、私たちはガラテヤ書の最後まで来ました。異邦人のガラテヤ人が、なぜか信仰を持った後に割礼を受けなさいと、偽教師らが教えていることに対して、パウロは論難しました。そして、キリスト者は自由を得るために召されたのだと話しましたね。しかし、その自由を、肉を働かせる機会とせず、「愛をもって互いに仕え合いなさい」(5:13)と教えていました。6 章は、その、愛をもって仕え合うということの実践について話しています。そして、最後に、結局、割礼を強いらせようとする人々の動機は何かを話しています。実に愚かしいことなのですが、人々は惑わされ、それをつい信じてしまうものです。そうした患いは、ない方がいいに決まっています。本来、キリスト者として召されていることに専念すればよいのです。

### 1A 愛によって仕える律法 1-10

#### 1B 過ちの陥った兄弟の回復 1-5

<sup>1a</sup> 兄弟たち。もしだれかが何かの過ちに陥っていることが分かったなら、御霊の人であるあなたがたは、柔和な心でその人を正してあげなさい。

愛によって互いに仕えることにおいて、イエス様が行われた働きで大きなことは、「過ちに陥っている人を立ち上がらせる」ことでした。ガラテヤの人たちが律法主義に陥っているのですが、イエス様は、律法主義の中にいる人々の中で、どのように罪から人を立ち上がらせたでしょうか？(ヨハネ 8:1-11) 姦淫の現場で捕らえられた女のことを思い出してください。まず、石で打ち殺そうとしている者たちに対して、「あなたがたの中で罪のない者が、まずこの人に石を投げなさい。(8:7)」と言われました。つまり、自分自身の行いをよく吟味してみなさい、ということです。そして、イエス様はこの女に、「わたしもあなたにさばきを下さない。」と柔和を示されました。しかし、「これからは、決して罪を犯してはなりません。」とされているんですね(8:11)。これが、正すことです。

このような、律法主義によって罪に定められる女を、イエス様は愛の律法によって立ち直らせました。この姿に倣うのが、ここにパウロが書いている、「御霊の人」であります。5 章にて、御霊の実

は愛であって、その現れの一つが「柔和」でありました。過ちに陥っている人に対しては、柔和な姿勢で正していきます。

「もしだれかが何かの過ちに陥っていることが分かったなら」とあります。この表現のように、故意に罪を犯し続けて心を頑なにしているのではなく、過ちに陥ってしまったことを教えています。このような人は、すでに自分の犯したことで良心を強く痛めています。その聖霊の働きで十分です。罪の自覚は聖霊がすでに与えておられます。ですから、自分に与えられているのは、立ち直らせる働きです。イエス様は、ペテロに対してそのことを行われたのを思い出してください。三度、ご自身のことを知らないと言いました。けれども、ご自身を否んだことを咎められなかったのです。復活後、ヨハネ 21 章で、三度、「わたしを愛しますか」と問われて、彼がイエス様について行く告白を引き出されたのです。

ある教会で高校生の女の子が妊娠してしまったことが発覚しました。教会では熟慮ゆえ、しっかりとそのことを公表しました。彼女を悔い改めるように促し、赤ちゃんを生む決意をしっかりとさせること、そして教会として、その悔い改めの心で彼女が生きるのを手助けすることを教会の人々に語ったとのことでした。

<sup>1b</sup> また、自分自身も誘惑に陥らないように気をつけなさい。

その柔和さは、自分自身も誘惑に陥るかもしれないという自覚から来ます。厳しく裁きを宣言するのは、自分自身はその罪を犯しうることに気づいていないからです。イエス様は、兄弟を正す時に、自分の目に梁があることに気づかせていました。「マタ 7:3-5 あなたは、兄弟の目にあるちりは見えるのに、自分の目にある梁には、なぜ気がつかないのですか。4 兄弟に向かって、『あなたの目からちりを取り除かせてください』と、どうして言うのですか。見なさい。自分の目には梁があるではありませんか。5 偽善者よ、まず自分の目から梁を取り除きなさい。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からちりを取り除くことができます。」

自分が正そうとしていく中で、自分自身が見えなくなり、自分自身が同じことを行っていくという誘惑があります。人間的に言うと、「ミイラ取りがミイラになる」ということです。聖書ではないですが、哲学者ニーチェの名言にこういうものがあります。「深淵をのぞく時、深淵もまたこちらをのぞいているのだ。」when you gaze long into the abyss. The abyss gazes also into you.」つまり、他人の間を見ている時に、実は自分自身の間も触発されます。そして、同じ過ちを犯してしまうかもしれません。聖書には、パウロがこのように言っています。「ロマ 2:1 あなたは他人をさばくことで、自分自身にさばきを下しています。さばくあなたが同じことを行っているからです。」ですから、自分自身を吟味することがとても大切です。自分にそういった肉の弱さがないのかを吟味するのです。そうすればさばかれません。「I コリ 11:31 しかし、もし私たちが自分をわきまえるなら、さばかれ

ることはありません。」

<sup>2</sup> 互いの重荷を負い合いなさい。そうすれば、キリストの律法を成就することになります。

互いに愛をもって仕えるということを、ここでは「重荷を負い合う」という言葉で言い表しています。過ちに陥るということは、その重荷の一つです。一人ひとりに、負い目があります。私たちは、まだ完成されていない者たちです。完成に向かって、一心に走っているのですが、それは一人の競走ではなく、互いに助け合い、注意しあい、励ます競走なのです。「ヘブル 10:24-25 また、愛と善行を促すために、互いに注意を払おうではありませんか。25 ある人たちの習慣に倣って自分たちの集まりをやめたりせず、むしろ励まし合いましょ。その日が近づいていることが分かっているのですから、ますます励もうではありませんか。」愛によって支え、助け、立ち直らせるのです。

そうすれば、「キリストの律法を成就することに」なるということです。モーセの律法は、数々の規定であります。キリストの律法というのは、隣人を自分自身のように愛するが、律法全体のまとめであることを主が言われました。パウロはガラテヤ 5 章 14 節で話していました。

<sup>3</sup> だれかが、何者でもないのに、自分を何者かであるように思うなら、自分自身を欺いているのです。

パウロは、私たちが他者の重荷を負っていくにあたって、注意を与えています。自分がそれだけ良いことができるのだという、うぬぼれが出てきてしまうことです。それらの良いことは、すべて神の賜物であり、自分から出たものは何一つないのです。それなのに、いつの間にか何者かであるかのように思い、自分自身を欺きます。「I コリ 4:7 いったいだれが、あなたをほかの人よりもすぐれていると認めるのですか。あなたには、何か、人からもらわなかったものがあるのですか。もしももらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。」あくまでも、「恵みによって」自分は立っていることを忘れてはいけません。自分自身には何もないのです。それにも拘らず、ただ、主が賜物をくださっていて、それを人々に分け与えているにしか過ぎません。

<sup>4</sup> それぞれ自分の行いを吟味しなさい。そうすれば、自分にだけは誇ることも、ほかの人には誇ることができなくなるでしょう。<sup>5</sup> 人はそれぞれ、自分自身の重荷を負うことになるのです。

ここで話しているのは、人を助けている働きは、その人に対して行っているものではなく、主イエスに対して行っているということです。行いを吟味すれば、ただ主に命じられていることを行っているにしかすぎないことを知ります。自分が他の人にしてあげているのではなく、あくまでも主に対して自分が払うべき重荷があるので、それを行っているのです。イエス様は、このことを主人としもべの関係の中で話されました。「ルカ 17:9-10 しもべが命じられたことをしたからといって、主人はそ

のしもべに感謝するでしょうか。10 同じようにあなたがたも、自分に命じられたことをすべて行ったら、『私たちは取るに足りないしもべです。なすべきことをしただけです』と言いなさい。」

ここで、「自分にだけは誇ることができ」る、と言っているのは、主に命じられていることを、行っているという自負心です。そして、主から報いを受けるという確信です。それは健全な自負心です。しかし、そのことは、言われていることを、したまでだということところにある自負心であって、他の人に誇れるものではありません。イエス様は、善行は隠れて行いなさいと言われていますが、それは、「マタ 6:4 隠れたところで見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」ということ。神が報いてくださることを知っているのです。でも人には、隠れています。

例えば、警官の人が、誰かが人を殴っているところを見かけて、その殴っているものを制止して、その人に手錠をかけて、殴られている人を助けたとします。それで殴られた人が警官に深いお礼をします。けれども、警官とすれば、それは、警官に命じられている職務であって、特別なことをしたわけではありません。自発的に誰かをそのような状況下で助けたのであれば、表彰されたりして、特別な注目が与えられますが、警官はやるべきことをしたまでです。警官としての誇りはあるでしょう。けれども、それを人に誇るものではなく、自分自身の中に収めているべきものです。

## 2B 神の家族への善 6-10

こうやって愛をもって仕えることについて見ていきました。重荷を互いに負う、ということです。次も愛によって仕えることですが、もっと積極的な面についてパウロは勧めをします。それは、「神の家族に対して善を行う」ということです。

<sup>6</sup>みことばを教えてもらう人は、教えてくれる人と、すべての良いものを分かち合いなさい。

パウロが、自分の他の手紙においても、何度となく語ってきたことであります。これは、使徒たちが、いかにみことばを教えることが、教会においてかなり優先順位が高いかを教えています。教会は、使徒たちの教えを堅く守ることを活動の大きな一つにしていました。そして、教会で、やもめの配分について不満が起こった時に、使徒たちは七人の執事を任命し、そして言いました。「使 6:4 私たちは祈りと、みことばの奉仕に専念します。」祈りとみことばに専念することができるように、他の執事(deacons)を任命したのです。ですから、良いものを分かち合うということ、つまり物質面でも支えるということは、その働きに専念することができるようにします。

けれども、これはもちろん、強いられるものではありません。パウロ自身が、コリント第一で、自分自身は働いて、あなたがたに負担をかけないと言っています。また、その背後には、偽教師たちがいて、彼らが食い尽くしているのを知っていたからです。「Ⅱコリ 11:20 実際あなたがたは、だれかに奴隷にされても、食い尽くされても、強奪されても、いばられても、顔をたたかれても、我慢

しています。」ですから、自分自身は物質的な報酬を受ける権利はあっても、その権利を敢えて用いないとまで言っています。あくまでも、愛によって、恵みを分かち合うために行います。

<sup>7</sup> 思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、刈り取りもすることになります。

パウロは、「良いものを分かち合」うことについて、それは、みことばを教えている人の益になるという、人間的な考えではいけないことを戒めています。そうではなく、自分自身を霊的に豊かにするのです。ここで、「種を蒔く」ことに例えています。種を蒔けば、実を結び、刈り取りがあります。それが、霊的にも同じことが言えて、良いものを分かち合うことが、そのまま自分自身にも霊的に豊かになるということです。ピリピの人たちから贈り物を受け取っていたパウロは、手紙の中でこう言いました。「ピリ 4:17 私は贈り物を求めているではありません。私が求めているのは、あなたがたの霊的な口座に加えていく実なのです。」贈り物について話すと、何か贈り物をせがんでいるように聞こえますね。そうではなく、霊的な口座に確実に自分のしたことの実が加えられている、ということです。

コリントの教会に対しても、パウロは、このことを教えていました。「2コリント 9:6-11 私が伝えたいことは、こうです。わずかだけ蒔く者はわずかだけ刈り入れ、豊かに蒔く者は豊かに刈り入れます。<sup>7</sup> 一人ひとり、いやいやながらでなく、強いられてでもなく、心で決めたとおりにしなさい。神は、喜んで与える人を愛してくださるのです。<sup>8</sup> 神はあなたがたに、あらゆる恵みをあふれるばかりに与えることがおできになります。あなたがたが、いつもすべてのことに満ち足りて、すべての良いわざにあふれるようになるためです。<sup>9</sup> 「彼は貧しい人々に惜しみなく分け与えた。彼の義は永遠にとどまる」と書かれているようにです。<sup>10</sup> 種蒔く人に種と食べるためのパンを与えてくださる方は、あなたがたの種を備え、増やし、あなたがたの義の実を増し加えてくださいます。<sup>11</sup> あなたがたは、あらゆる点で豊かになって、すべてを惜しみなく与えるようになり、それが私たちを通して神への感謝を生み出すのです。」

<sup>8</sup> 自分の肉に蒔く者は、肉から滅びを刈り取り、御霊に蒔く者は、御霊から永遠のいのちを刈り取るのです。

分け与えることだけでなく、すべてのことについて、この種蒔きと刈り取りの原則があることを教えています。5 章にて、パウロは、肉の行いについて話しました。キリスト者に与えられた自由を、肉の働く機会とせず、愛をもって互いに仕え合いなさい、と言っていました(5:13)。しかし、もし肉に種まくことをやっていたら、滅びを刈り取ることになる、と警告しています。5 章 15 節では、「ガラ 5:15 気をつけなさい。互いに、かみつき合ったり、食い合ったりしているなら、互いの中で滅ぼされてしまいます。」とありましたね。本当なら、御霊の実があふれるばかりに結ばれるはずなのに、

平安や憐れみが留まるのに、心には荒波が襲ってくるだけになり、平安とは裏腹に、恐れやうちのめされた思いや、しまいには体も蝕むことになるかもしれません。

牧者チャックが分かち合っていました。カルバリーチャペルの近所にある教会の牧師が、カルバリーチャペルが祝福されているのを妬んで、ひたすら、聖霊の賜物が今も続いているというカルバリーの立場について、批判をする説教をし続けたのだそうです。周囲の人々も、心配しても、彼はやり続けたそうです。ついに、彼は体を壊し、入院したそうです。そして、なんと、カルバリーチャペルは、その入院費の支援を出したそうなのです。

しかし、御霊に導かれて、愛によって良いことをしていけば、御霊のいのちで豊かにされます。最後には、永遠のいのちに至るのです。この豊かさを、分け与えるということ、人々を祝福するというので、もっともっと味わっていききたいですね。

<sup>9</sup> 失望せずに善を行いましょう。あきらめずに続ければ、時が来て刈り取ることになります。

ここは大事な点です。今、話したように善を行っても、結果がすぐに見えとは限りません。時間がかかります。だから、ちょうど作物を育てているのと同じように、忍耐が必要です。実を結ぶまで時間がかかるのです。収穫の時を待たないといけません。けれども、結果が見えなくとも、必ず刈り取りの時が来ることを信じて、失望せずに善を行っていきます。目に見えるかたちではなかなか現われないというのが宣教ですが、これが無駄に終わることはないのです。

<sup>10</sup> ですから、私たちは機会があるうちに、すべての人に、特に信仰の家族に善を行いましょう。

愛によって善を行っていくのは、すべての人に対してなのですが、「特に信仰の家族に」善を行います。教会において、何か事欠いている人がいるならば、助けていきます。もちろん、社会にはいろいろ事欠いている人たちがいます。そういった人々にも働きかけることも大切でしょう。しかし、特に、とあるように、教会の人々に善を行うのです。思い出すのは、アメリカにいる時に、妻が妊娠しました。ちょうどその前に、性についてのセミナーに、カルバリーに通っている産婦人科医の方が講義をしました。その方のクリニックを探して、それでお世話になったのです。子宮筋腫だったので、筋腫を摘出する手術をしていただきました。そのクリニックには、この御言葉が掲げられていました。「特に信仰の家族に善を行いましょう」という御言葉です。

## **2A 十字架による迫害 11-18**

ここで、愛によって互いに仕えることの勧めが終わりました。パウロは、最後の挨拶をしますが、ガラテヤ書を書いた大きな理由は、こういったキリスト者の歩みを、横から邪魔を入れて、妨げていた者たちに対して論難することでした。彼らの走っている競走に立ち入って、途中で脱落させよ

うとしている者たちでした。彼らが、結局、なんで異邦人の信者たちに割礼を強いらせようとしているのか？高尚な理由ではありません、とても単純なことなのです。

#### 1B 外見の誇りとしての割礼 11-14

<sup>11</sup> ご覧下さい。こんなに大きな字で、私はあなたがたに自分の手で書いています。

パウロが手紙を書くときは、口述筆記者によって書いていました。自分で書くのではなく、自分が言ったことばを、他の人に書いてもらっていました。しかし、このように直接、自分の筆記を残すこともあります。「こんなに大きな字で」と言っていますが、ここからパウロは目が悪かったのではないかと推測できます。4章に、ガラテヤ人が目をえぐりだしてでもパウロに与えたいとまで思っていたことが書かれています。それでも、最後のことばとして、今パウロは、ガラテヤの人たちに、パウロ自身がこの言葉を言っているのだ、と強調するために話しているのです。厳格なパリサイ派出身で会ったパウロだからこそ、彼らの心の動機がよく分っていました。

<sup>12</sup> 肉において外見を良くしたい者たちが、ただ、キリストの十字架のゆえに自分たちが迫害されないようにと、あなたがたに割礼を強いています。

偽教師たちは、あたかも高尚なことを語っているようでありました。けれども、それは、へつらいであり、「肉において外見を良くしたい」ということなのです。言い方を変えれば、「人からどう思われるかが、気になっている」ということです。ユダヤ人たちは、自分たちが神の民であることを示すために、割礼を受けていることが誇りでした。その中で外見をよくするために、割礼を受けさせている、ということなのです。教会の中に、いろいろな教えが入ってきます。そして、いろいろ高尚な話をするのですが、結局は、「世間で言われていることに、遜色ないようにする」というものが根底にあります。

そして、「キリストの十字架のゆえに自分たちが迫害されないように」しているのです。私たちがこれまで学んできたように、十字架は人をつまずかせます。「2:21 もし義が律法によって得られるとしたら、それこそ、キリストの死は無意味になってしまいます。」とありました。キリストの死は、他に私たちが、自分たちにある何らかの行いで救われるという可能性を、すべて無くしています。イエス様が、「もし、できますならば、この杯を過ぎ去らせてください。」とゲッセマネの園で祈られたように、もし、私たちが何かによって救われるのであれば、神の御怒りを表している杯は過ぎ去らせてください、ということなのです。しかし、父のみこころは、主が死なれることでした。このことによってしか、人は救われることができないからです。だから、つまずかせるのです。この方によってのみ、この方の死によってのみ救いがあるわけで、他の救いの道はないことを明らかにしています。それが、キリストの十字架を宣べ伝えると、迫害を受ける理由なのです。

しかし、信じる者には十字架は、新しい創造を与えます。自分のすべての罪をキリストが十字架で負ってくださいました。罪はその流された血によって清められています！そして、御霊が自分に与えられ、神の子どもとして生まれたのです。このとてつもない恵みの中に、私たちは生きています。そこに平安があり、喜びがあります。迫害はあるけれども、それでも十字架を他のものに代えることはできないのです。

偽教師たちは、迫害を受けたくないで、割礼を受けないと救われたいとしていました。ユダヤ人からは、ユダヤ教徒になったとみなされるので、迫害を免れます。また、ローマは多神教でしたが、ユダヤ教に対しては社会的地位を与えていました。しかし、異邦人がそのまま、一神教を信じるということには許容できないという圧迫を、与えていくようになります。だから、割礼さえ受けていれば、圧迫や迫害を免れるようになるのです。それで、割礼を救いの条件にしました。けれども、一つ、割礼を受け、律法を守り行うようになれば、その中でがんじがらめになって、奴隷状態になるのです。自分は、迫害を免れて自分を救おうとしているかもしれないけれども、実は、自分のいのちを失うことになるのです。

私たちの周りには、そういった「これさえやっておけば、あなたは圧迫を受けなくて済む」というものがあると思います。けれども、まっすぐに信じているのに、迫害を免れるために、他に付け足せば、がんじがらめになります。イエス様が言われたことを思い出しましょう、「マル 8:35 自分のいのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしと福音のためにいのちを失う者は、それを救うのです。」自分を救うつもりが、それが命取りとなっていくのです。

<sup>13</sup> 割礼を受けている者たちは、自分自身では律法を守っていないのに、あなたがたの肉を誇るために、あなたがたに割礼を受けさせたいのです。

律法主義に陥っている人たちの特徴です。「自分自身では律法を守っていない」のです。律法を守っていないのに、いや守っていないから、ますます律法を他の人に強要していきます。キリストの福音以外のことに、自分たちの強く信じているようなもの、教えを過度に強調している人は、かえって自分自身がその教えを守っていません。

そして、「あなたがたの肉を誇るため」と言っています。彼らの思いは利己的なのです。ちょうど、自分たちの働きによって、何人もの人が洗礼を受けました！というような成果を見せることができれば、人々に誇ることができますね。中身は関係なしに、ただ洗礼を受ければいいんだよ、と誘って、多くの人を受けけるのを写真にとって、そして SNS にアップしたりしたら、ああ、この教会はすごい！ということになります。宣教師たちの間の話では、これは結構、切実なものだそうです。アフリカでは、何か伝道集会をする時に、それがいかに大規模で行われたかを、アメリカの本部に伝えることができるように、動員をかけることができますよ、という話が出てくるほどなのだそうです。

律法を強調しているからといって、律法を大切にしているのではなく、肉の思いになっているだけにしか過ぎないのです。

<sup>14</sup> しかし私には、私たちの主イエス・キリストの十字架以外に誇りとするものが、決してあってはなりません。この十字架につけられて、世は私に対して死に、私も世に対して死にました。

先週の礼拝で、ここの箇所をじっくりと見ていきました。私たちの誇りは、主イエス・キリストの十字架のみなのだということです。神が十字架で示された愛があります。また十字架にある解放の力があります。十字架にある恵みがあります。これらを誇るのです。

そして、世と自分との関係は、十字架なのだということです。「世は私に対して死に」というのは、十字架を宣べ伝えている中で、世は自分たちが死んでいることを知ります。罪の中に死んでいることです。そして、自分が世に対して死んでいるというのは、世に対して、その誘惑や誇りについて、私はもう死にました、ということです。

## 2B 新しい創造にある平安 15-18

<sup>15</sup> 割礼を受けているか受けていないかは、大事なことはありません。大事なのは新しい創造です。

ガラテヤ書全体のクライマックス、まとめといっても良いかもしれません。大事なのは、「新しい創造」です。御霊によって新しく生まれることであります。「Ⅱコリ 5:17 ですから、だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」これが、パウロがガラテヤ 3 章、4 章で論じていた、信仰によるアブラハムの子孫ということです。神によって新しくされたこの歩みが大事なのであり、割礼という外部の傷は大事なことはありません。

ところが、しかし私たちが、外見のことを大事にすることが、どれだけたくさんあることでしょうか。先々週、同性愛について、それに反対する団体が立ち上がり、その団体を潰すために立ちあがった、同性愛賛成の団体が立ち上がり、それぞれが署名活動をしています。私は、どうでもいい！と思いました。同性愛者を含めて、ここに来る方々がイエス様を知り、救われることだけを望みます！どちらかでなければいけない、というような迫りを受けます。これは、いわば割礼を受けるべきか、受けないべきかのような議論ですね。そういえば、コリント第一 7 章では、割礼を受けたユダヤ人が、割礼の跡を消すべきか悩んでいる箇所も出てきます。パウロは、そのままにしておきなさいと勧めています。割礼を受けることも大事でないし、また割礼を受けないことも大事なのではないのです。そうした外側の行いではなく、新しい創造こそが大事なのです。

<sup>16</sup>この基準にしたがって進む人々の上に、そして神のイスラエルの上に、平安とあわれみがありますように。

「この基準」とは、割礼の有無ではなく、新しい創造という基準に従って進む人々に、平安と憐れみがあります！これこそが、神の救いの恵みですね。平安に満たされます。そして、憐れみがあります。そして、「神のイスラエル」とあります。外見だけのイスラエル人ではなく、御霊によって心の割礼を受けているイスラエル人ということです。パウロがロマ 2 章でこのことを話していました。「2:28-29 外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また、外見上のからだの割礼が割礼ではないからです。29 かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による心の割礼こそ割礼だからです。その人への称賛は人からではなく、神から来ます。」新しい創造を経た異邦人の信者と、真に霊的にイスラエルとなったユダヤ人の信者に、平安と憐れみがありますように、ということです。

<sup>17</sup>これからは、だれも私を煩わせないようにしてください。私は、この身にイエスの焼き印を帯びているのですから。

ここに、パウロの深い感情が伝わってきます。「煩わせないでほしい」と。平安と憐れみの実を結ぶ、福音です。愛によって互いに仕える福音です。愛によって仕えることのできる自由を与えるのが、キリストの十字架です。御霊が注がれます。このようなから引き離して、惑わしてきたのが割礼を強いる者たちです。

そこでパウロは、「この身にイエスの焼き印を帯びているのですから。」と言っています。彼らは、包皮の一部を切り取ることに拘っていましたが、パウロ自身には、すでに身体に傷がありました。もうこれで十分、ということです。それは、キリストの名によって、むち打ちによって傷ついたものでしょう。しかし、それはキリストのしもべであることの証しです。それで、「焼き印」と呼んでいます。

<sup>18</sup>兄弟たち。私たちの主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊とともにありますように。アーメン。

最後は、主イエス・キリストの恵みを祈っています。すべてが恵みによるものだ、ということです。

このようにして、私たちはパウロの手紙の三つ目、ガラテヤ書を学んできました。ローマ人への手紙、そしてコリント人への手紙、そしてガラテヤ人への手紙です。神の福音について、信仰による義について、パウロは多くを語ってきました。次はエペソ人への手紙です。エペソ人への手紙は、教会について教えています。教会というものが、いかにキリストが満ちておられるところかを見ていきます。